

山と博物館

第 3 卷

第 3 号

1958年3月20日



クロサンショウオの産卵 四月の声を聞くと、白馬山麓佐野坂地方の融雪間もない池に、冬眠からさめたクロサンショウオがぼつりぼつりと現われ始める。中旬には、いつの間に産卵が終ったのか、白い綿のような卵塊がちらほら見られる。その産卵をキャッチしようががんばった結果、上のような写真を撮ることができた。産卵30分後、なおも卵塊を見守るオスの姿である。

大 町 山 岳 博 物 館

人のいる山奥

奥田郁太郎

私は山についての一つの幼い記憶を持っている。山についての深い記憶はいくつかあるのだが、そのうちで殊に一つが中心になっている。

私は山國の出ではない。山について経験が多いわけでも無い。むしろ山をあまり知らない方だろうと思う。戦後この山麓に移住して今日まで五年半を、朝夕白馬岳の雄姿を見ながら暮しているのに、登ったのはまだ一度しか無い。だから山登りに熱心な方でもない。

だが、私は山が好きだし、山についてのその幼い記憶は、自分の仕事と関連して一つの大切なものになっている。

私は画を描くことを仕事にしている。至って未熟で、その上至って怠け者だから、自分の仕事についてまだまだ分っていない。絵画的なものがなかなか解らない。絵の仕事を進めてゆくのに、詩を唯一の手掛りにしてやっている。ようやく少しづつ、絵画的要素で絵を見ることができて来たような気もするが、結局解らなくなると詩の要素で解決することになってしまう。

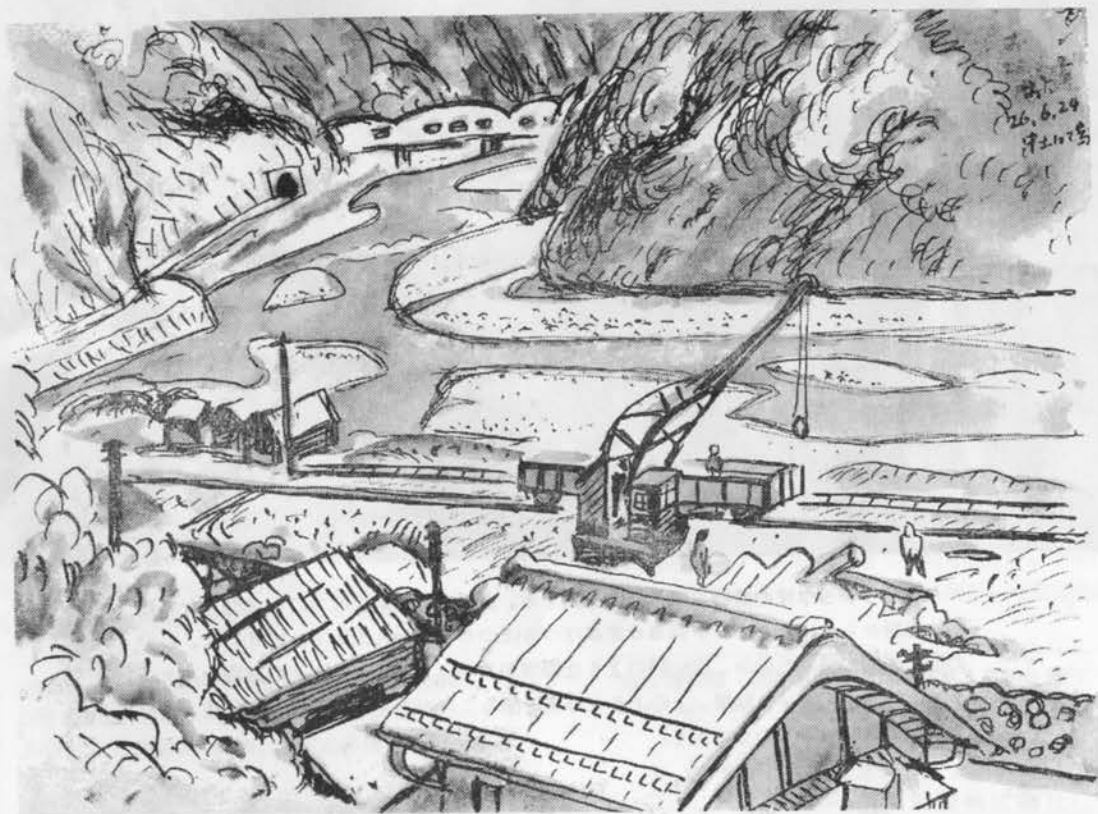
絵画と詩とは本来別のものかも知れない。しかし現在の私には、それが別のものだということが、分らない。

私は現在、自分の画因も詩に置いている。自分の詩について考えることが多い。子供の時の初めての感動が自分の詩のもとになっているような気がする。山の深い記憶もその感動の一つとして、だいじなものに思っている。

私は東京で生れ、東京で育った。田舎には全く親類縁故が無いから、田圃も、山も知らずに育った。山の匂いをかぎ、山の上から遠くを見晴すという経験は、七つの歳にはじめて得た。父が山登りに連れていってくれた。

父は山がとてもしきだった。高山へ登るということよりも、山懐ろをのんびり歩くという好みだった。貧乏だった父は殆んど日帰りの山歩きしかしていない。東京近郊の有名無名の山に登り、また名もないような鎌倉を見つけては、その谿を歩いた。その趣味は、逆者だった父の七十何歳までも続いたが、歳取ってから、長男である私の生活力がゼロであったため、やはり日帰りの山旅しかできなかった。私の親不孝は数え切れない。山の追憶を書いているうちに、まざまざと親不孝の一つに突き当たってしまった。

七つの歳にはじめて山へ連れて行ってもらってから、



年に一二度づつ山へ行くことができた。そしてその度に次第に山に惹きつけられて行く、数々の感動を得た。

軽便鉄道の終点の小さな駅。駅を出ると目の前にそそり立っている山。山の匂い。朝と夕方耳にこびりつく谿川の音。街道沿いの貧しい家並。その屋根の上に本当に真赤な、晩秋の夕焼の富士を見たこともあった。

思い出せばきりがない。その中でも大切な記憶は八つの歳の山登りの時にある。

父と私は小高い所に立っていた。谿の向うを大きくうねり曲っている白い街道。街道を走って行く乗合馬車。その馬車で、私たちはこの山の麓まで来たのだが、山の麓でしばらく休んだ馬車が、今日の下を走ってゆく。私は父に聞いた。あの馬車はどこへ行くの。父は言った。あれは、うんと山奥へ行くのだ。まだ自分さえ行ったことのない山奥へ行くのだ。と。

大きな谷の白い街道を走る乗合馬車が、一つの映像となって私の感情に焼きついた。父を尊敬していたから、父さえ行けない山奥という、その山奥に感動したのだ。

それは遠い昔の一瞬のことに過ぎない。だが、その一瞬の中に、自分の詩の本当に中心になる要素の一つがあ

るような気がする。漠然としたものの中に幽かに浮いたその一瞬を、いろいろに考えて見ることもある。

私はその時から山奥に憧れる気持を持ったのではないかと思う。山を好きだと言っても、私の場合は人跡未踏な高山に憧れる気持と少しちがうようだ。至純の美、壮絶な眺望を求めて、より高い山、より深い谷とわけ入る気持も分らないではないが、しかし、私の山に憧れる気持はそれとは少しちがうような気がする。私の求める山奥は、人跡を離れる程高く、あるいは深い所にあるのではないような気がする。

あの乗合馬車が行き着いた所。その終点。人の居る山奥。それが私の求める山奥の限度なのではないか、と考えている。(26.6.26)

註 筆者は一水会委員 日展委員
長野県北安曇郡白馬村

※昭和26年本館で「北アの四季」という図書の発行が計画され、その後種々の事情でそれが中止となってしまった。執筆者各位に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。今後逐次本紙に掲載して行く予定です

北安曇の民話 ①

七道の面

大町南高等学校教諭 青木

白馬村北城区の切久保のお祭はこの地方でも最も珍しい立派な祭礼である。祭は昔は旧七月七日だったので七道の祭ともいう。この祭は北城区の塩島から新田を通り切久保のお宮まで笛太鼓ではやし、のぼりを立てにぎやかにねって行く。このお宮には宝物として三箇の面がある。神社に着いた祭列は拝殿から石段下まで、天狗や鬼の面の装束姿で写真のように往復する。

この七道の面についておもしろい話が伝わっている。切久保のある家で嫁をもらった。その嫁の名をおかるといった。初めは一家の仲もむつまじかったが、なれるにしたがって嫁のおかるは姑(しうと)をじゃま者にしだした。姑の方でも「何嫁のやつが」と角つき合わせるようになり、二人の間にはわずかなことでも争いがたえなかった。何時の間にか隣り近所の評判になっていた。ある晩のこと嫁はうらみをはらしてやろうと、氏神さまである切久保のお宮へ忍び込み、宝物である鬼の面一つを持ち出して、これを家の裏でかぶった。その晩はやみや夜であり、風の強い夜でもあった。真夜中であるので、はるか遠くで犬の鳴声が微かに伝っていた。頃はよしと考えた彼女は姑の寝間の障子の破れ目から姑を呼び起し「日頃おまえは嫁のおかるをいじめる、けしからんやつ

治

だ。今夜は俺がかわって、その怨をはらしてやるぞ」とおどした。姑が驚いて見ると、世

にも恐しい鬼が赤い面を輝かしてのぞいているのでびっくりして気絶してしまった。

おかるは計略の図に当たったのを喜んで一先ずお宮へ帰りその面を取ってもとの場所へ納めようとしたが、どうしたものか面はびったりと顔にくっついてはなれない。いくらもがいてもどうしても取れない。そうこうする中に夜明けも近づいてきた。おかるは申訳なささと後悔の念で胸もかき乱れ思案にあまってそこを飛び出し、ついに楯(くす)川岸の岩穴へその身を隠してしまったという。家の人たちも夜中の物音に驚き眼を覚すと姑は気絶しているの、早速手当して生きかえらせた。しかし嫁のお



かるはその夜限り姿を現わさなかったで、これはおかるの仕業に違いないということになった。切久保のお宮では鬼面が一つ不足したので新しくつくった。おかるのかくれた岩穴は松川上流の倉下の穴へ抜けているといわれ、その倉下には小さな祠（ほこら）があり、十二と呼ばれ、昔は境内に大きな樹があったといわれる。またこの鬼の面を冠ったおかるは白馬連峯の一つ杵子岳へ上ったという。七日の祭の日には面が一つ足りないで、それを充たすために、おかるが降りて来るので、必ず七道の祭の当日は今でも必ず三粒でも雨が降るといわれる。



信州文学碑散歩

(3)

大町南高等学校教諭 福沢武一

景樹・真弓歌碑

北安曇郡池田町会染区
十日市場川会神社

田中の畦道を近道して川会神社へ向う。——北安曇が生んだ桂園派の歌人、内山真弓の歌碑を訪れるために。東山の丘陵が紅葉し、午前の薄陽にかがよっている。

神社に着いて、碑の場所はすぐ知れる。——鳥居の外側に、つましく立っている。高さ1メートル、幅70センチ程。ただ縁（へり）とりをしただけの板石。その表面に次の歌文が読まれる。

真弓ぬしわが桂園をいでて、信濃の故郷へ帰るに、山路の寒さをいたみ思いやりてよめる。長門介平景樹
日数さえ十日市場の道なれば立つにも願ぐわが心かな
寄道祝 門人真弓



敷島の道は余りに広ければ道とも知らで人や行くらん
碑陰に、嘉永六丑どし神無月とし、真中に、筆子中を大書する。ほかでもない。これは出色の筆塚

真弓の詠歌は、彼一代の代表作でありもする。

真弓は当地で生れ、京は香川景樹の桂園塾において歌道の研鑽（けんさん）をかされた。その帰郷に当り、師景樹が詠み与えた餞別歌がさきのもの。時は文政6年旧10月下旬。寒さも身にしむ頃、景樹は愛弟子のために心をいためているのである。

真弓は故山に帰来するや、育英につとめ、その門弟300といわれる（「北安曇郡志」による）。それらの弟子が師真弓と、師の師景樹を記念して建てたのがこの歌碑なのだ。

嘉永といえは、明治維新前夜。真弓の没年はその5年だから、碑は翌年、なき師の思いでも新たな時に建てられている。恐らく門弟の一人が歌文を筆にしたと思われる。碑を前にして感慨にふける。歌文に特に感心したのではない。その能筆に必ずしも賛嘆したのでもない。ひとえに師弟の恩愛に心をはせる僕である。

許された以上の時間をここで費し、やがて静まり返った心をして立ち去る。参道を南し、真弓の生地十日市場の部落に入る。生垣にかこまれた一畝（かく）——こゝが山内家の墓地。

簡素なる一基の碑なりき辞世も誌さず歌人内山真弓
利兵衛の墓

墓碑のあはれ小さな石仏は童子ならむその合掌の可愛ゆき手もと

墓地を出、部落をぬける。時間にせきたてられ、じっとバスを待ってられない。あたりをほつつき歩いて気を紛らす。

傍に小川が流れてい、狂い咲きの勿忘草がそこに可憐な花を綴っている。あゝこゝにも咲いていたんだな。待つことかなりしてバスが来る。急いでる。

バスは取入れの殆んどすんだ田づら池田へと走っていく。

北アルプスの地質と岩石

信州大学教育学部助教授 田中邦雄

北

アルプスは様々の岩石から構成されている。これを大別すると次の様になる。

- 1、古生代層および中生代層 2、花崗岩類 3、アルカリ岩類 4、ふいん岩類 5、蛇紋岩類 6、安山岩類

古生代層は白馬岳頂上附近、木崎湖西岸、梓川流域、上高地附近に分布し、岩石は粘板岩、砂岩、チャートを中心とし、稀に輝緑凝灰岩、石灰岩、礫岩をはさんでいるこれらの分布地域の中で最も研究の進んでいる地域は梓川流域～上高地附近で、梓川層群とよばれている。北は徳本峠、大滝山、蝶ヶ岳から常念岳附近に及び、常念岳では黒雲母花崗岩に貫ぬかれている。古生代層と花崗岩類の接するところはホルンフェルスとなっており、一ノ俣附近では董青石・黒雲母ホルンフェルスを作っている。これらの古生代層は白骨温泉附近や霞沢、徳本峠の石灰岩から産する紡錘虫の化石（パラフズリナ）により二疊系中部と考えられている。南は木曾谷にかけて拡がり、西は飛騨高原にかけて広く拡がっている。岐阜県吉城郡の福地では日本で一番古いゴトランド系が分布し、研究もよく進み、日本の古生代層研究の標準になっている。（第1表）

福地附近の古生代層の順序		
地層	岩石	化石
1. 福地系(下層)	凝灰岩、石灰岩	紡錘虫、三葉虫、腕足類
2. 高梨系(中層)	砂岩、頁岩	三葉虫、腕足類
3. 一谷系(上層)	石灰岩	紡錘虫、腕足類
4. 木曾系(下層)	石灰岩、凝灰岩	紡錘虫、腕足類
5. 空山系(野崎)	礫岩	

中

生代層は仁科三湖の西から姫川の西岸に南北に断片的に分布する。岩石は砂岩、頁岩、礫岩で、頁岩の中からは深水産二枚貝（シジミの類）、羊歯植物、裸子植物等の化石が見つかっている。特に中土村来馬附近は古くから植物化石を産することにより有名で、来馬統と呼ばれ研究が進んでいる。時代は下部ユラ系。花崗岩類は進入した時代から見ると、新期と旧期の二

つに区別することが出来る。旧期花崗岩類（下ノ本型・船津型）は裏銀座の鷲羽岳、三俣蓮華岳、双六岳附近に分布し、片麻岩様の部分があり、又塩基性の捕獲岩をもつ事が特徴で、岐阜県では古生代層を貫き、上部ユラ系の手取統に被われている。従って古生代末から中生代初期に進入したものと言える。新期花崗岩類（高瀬型）は高瀬川流域、中房川流域、燕岳附近に南北の方向性をもって分布している。黒雲母花崗岩や角閃石黒雲母花崗岩で、混成現象が少なく、しばしばモリブデンを含むのが特徴である。ユラ系手取統、来馬統に接触変質を与え、この礫が第三系中新統の礫岩の中に汎山含まれているので、中生代末に進入したものと考えられる。

仁

科山脈のアルカリ岩類は古くから有名で、木崎岩、青木岩および鹿島岩と名づけられている。共にナトリウム、カリウムの多い岩石で、特に木崎岩は月長石を含む石英斑岩として名高い。高瀬峡附近には、これらと類似の岩石が露出し、高瀬岩とよばれている。これは鹿島岩によく似た岩石で、爺子岳以南の後立山連峰にまで連続して分布する。高瀬峡西では新期花崗岩と移り変るところが見られ、恐らく新期花崗岩から分化したものと思われる。

ふいん岩類は岩脈として古生代層、花崗岩類を貫き、槍ヶ岳、穂高岳、蓮華岳、針ノ木岳等の高峻を形成している。一般に斑晶は少なく、ちみつで、節理が多く、流理構造が目立つ。粗粒の花崗岩や古生代層の岩石を捕獲している。輝石安山岩とよぶ学者もある。

蛇

紋岩はかんらん岩、斑れい岩等の塩基性深成岩から変化する場合が多いが、白馬岳山麓の二股附近、八方尾根等に分布し、古生代層を貫ぬき、来馬統と断層で接している。僅かのニッケル、クロムを含む安山岩類は前記の諸岩類を破って最も新しい第四紀に噴出したものが多く、いわゆる火山を作り、中でも焼岳はトロイデ型の活火山として名高い。主なものは御岳（稀に角閃石をもった複輝石安山岩）、乗鞍岳（稀に黒雲母角閃石をもった複輝石安山岩）、焼岳（稀に黒雲母輝石をもった角閃石安山岩）、鷲羽岳北峰・雲ノ平（角閃石安山岩）、白馬乗鞍岳・風吹岳（複輝石安山岩・角閃石安山岩）等で、どれも一回の噴出でなく、数回の噴出により、山体を形成したものである。多くは爆裂火口に水をたゝえた火口湖をもっている。

春を待っている

ヒメギフチョウのさなぎ

大町小学校5年

腰越正一郎 横山 良子
戸谷 良子



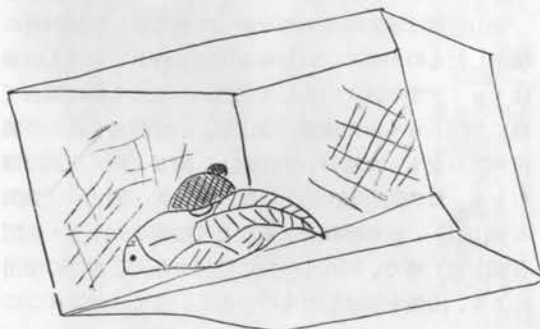
ています。

私たちが先生から、ウスバサイシン、という植物の葉の裏にかたまっている、7この卵をいただいたのは、5月19日のことでした。卵はすき通った青色で、直径1mm程の小粒なものでした。



まず植物をからさないために植木ばちに植えて、のき先で飼うことにしました。やがて卵は美しい真珠色に変わり、5月22日に最初のケゴが3匹生まれました。黒つばい2mm位の大きさです。次の日までケゴは5匹になったが、後の2この卵はついにむけなかった。

生れたケゴはすぐに動き始め、葉の裏から小さな穴をあけて葉を食べ始めた。ウスバサイシンの葉はケゴたち



マッチ箱の中のさなぎ

の食べ物であることがわかった。

はじめはウジのような感じだった幼虫にも毛が生えて5mm位の大きさになってきた。6月4日、11日、19日と皮をぬいでしまいには気味の悪い程毛が長くなり、大きさも2cm以上になってきた。この幼虫は厩まは、いつもなかよく、葉の裏にいて、目立たないようにかたまっているが、うっかりするとうろつき始める。いないのでさがして見ると、ざぶとんを重ねたすき間に入っている時もあった。こんなわけで、とうとう3匹、どこへ行ったかわからなくなってしまった。金あみばりの箱を作って、にげられないくふうもした。

生まれてから15日目に、5匹でやっと1枚の葉を食べおえて、別の葉に移ったが、大きさが2cm以上になると、2匹で2日間に葉を3枚も食べた。

ところがしばらくするとあまり食べなくなり、横に太ってきた。箱の板についてじっとしているので、いよいよ蛹になるのだと思って、マッチの空箱を3こ入れてやった。まもなく一つの空箱に2匹入って、じっとしていたが、そのうちに1匹は見えなくなってしまった。

次の日、空箱の幼虫は糸をはいて体をゆわえつけ、急にいきみ出した。見ているまに鮮やかな青色をした蛹になった。幼虫とは比べものにならない程美しかった。1時間後に見ると蛹はもう茶褐色に変わっていた。いなくなった1匹も植木ばちの底で蛹になっていた。

蛹は来年の春でないと蝶にならないこと、また湿り気をなくすと死んでしまうことがわかったので、コケでマッチ箱ごとつつみ、植木ばちにも時々水をかけておいた



この蛹が蝶になったら、卵のあった所までもって行って、はなしてやろうと思っています。(終)



植木ばちの底にいるさなぎ

大糸線沿線 今冬スキー場見た記

今シーズンは各スキー場とも暖冬になやまされ、せつかくかき入れ時の年末年始に雪のなかったスキー場が多かったが、幸い大糸線沿線のスキー場は、暮の二十九日から降り出した雪は三日まで続き、それで大助りといったところ。

しかし暖冬の打撃は大きく、細野ではすでに十二月二十日頃から、正月用品は降雪前にと多い家では魚、調味料、飲料等数十万円も準備し、客が来ても手を取らぬようにした所、さっぱり雪が降らずその上「雪ナシ」の電報料も大変なものだった。年末に一稼ぎしようとした新田、塩島、小谷は、業者の営業策もあってか雪の無いのに客をつれてき、金を返せという一幕もあったが、ともかく正月に入ってからスキーのできたのは何よりであった。

今年の客種を方面別にみると、例年とはほぼ同じく関東がトップであるが、昨年の大糸線全通で関西方面からの客が大部増えて来た。

北陸線廻りで入信し、帰りは中央線というものあるいはこの逆をとる廻遊組が目立ち、第三位にはやはり名古屋方面が多かった。民宿業者に客質について聞いてみると、京都、大阪方面の客が一番良く、次いで関東、名古屋の客が一番扱いにくいという。客のふところ具合は案外悪く、一部の上流家庭人を除いて大部分が二十代のそれも学生が多く、茶代を置いて行く者は十人に一人位で、十円の釣銭を持って行く者が大部分だという。

スキー場別の景気を見ると、なんといっても細野が多く、今年は八方尾根にケーブルカーが架設されるというので一層人気がある。

大町スキー場は地元大町市の日帰り客が多く、初中級向きの同スキー場は親子連も目立って、スキー場へバス横付けが魅力だ。ヤナ場もあいかわらず日帰り客が多く、リフトのついた神城スキー場も人気は昇り坂で、下車客も多くなった。南小谷は長いスキー層が物言って案外良く、昔からの団体客を持っている強味が二月、三月に入って現われている。新設の白馬高原はお隣の西山に目と鼻の間だけに思わぬ拾いものもあるようで、ハウスの設備も良い。やはり今冬から誕生した佐野坂高原は白馬山麓随一の雪積量と大町から近いということで今後の発展が望まれるが、何といっても宣伝不足、リフトをつけたら素晴らしいスキー場になるだろう。小谷温泉は年末唯一の雪積スキー場として賑ったがその後は近いスキー場に客足をとれたようだ。

今シーズンを通じてみて、年末年始に相対的に昨年より少なかった客も二月、三月で大部カバーされたようで大糸線沿線は温泉のないのが悩だが、一泊四百円そこそこで泊れ、餅だ、甘酒だ、汁粉だとサービスの良いのが魅力であるようだ。これで汽車の客車ももう一輛増結されたら楽しいスキーができるが、というのがお客の真の声であるようだ。(長沢武)

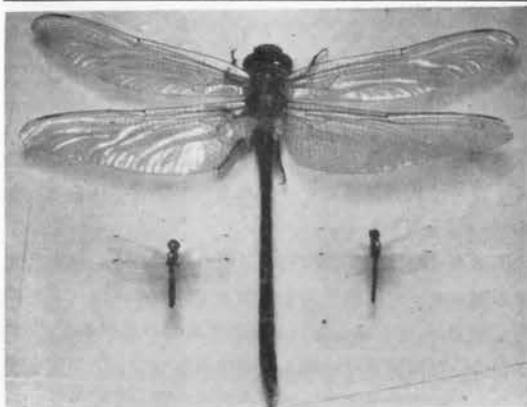
岳人の里 鹿島部落に 「登高」をたずねて

山は年中岳人に抱かれている。春山シーズンの訪れとともに再び北アも活況を呈してきた。2月26日とんがり山岳会11名が鹿島部落にやってきた。続いて関西山岳会、東京理大山岳部……とすでに14組からなるパーティーが鹿島槍の雄を目ざして、この部落を訪れている。大学は年度末休暇に入ったのだ。部落のほぼ中央に登山者に親しまれている狩野治喜衛さんの家がある。登山者の憩いの場所であり鹿島の里を訪れた人なら知らない人はない程、鹿島槍と深く結ばれている。吉田二郎氏は鹿島槍研究で「鹿島槍があるために鹿島にくるのか、鹿島があるために鹿島槍へ登るのか、自分でさえよくわからなくなってしまうことがある。それほど鹿島槍と鹿島、山と里と人のかもし出す雰囲気は僕を魅了しきっている」とさえいっている。こゝで逢う人々は必ず登山記念帳にサインする。記念帳

には表紙に「登高」と書かれ、昭和5年から9冊にも及びボール箱一つにぎっしり詰っている。長き伝統は「昭和5年12月9日快晴を迎い鹿島槍ヶ岳に登頂す立教大学山岳部堀田弥一」から始まり、単独行で有名な今はなき加藤文太郎の筆跡も見られる。狩野さんは家宝のごとく大切に保存、「火車にあったら真先にと登山者が冗談にいつてくれた」と笑いながら語ってくれた。このたどたどしい筆を眺めていると、今と過去の登山、また激増する登山者、鹿島槍を知る上に貴重な資料になるだろう。雪やけたひげののびきった逞ましい山男が浮んでくる。

写真は「登高」





保護したい昆虫 ①
はっちょうとんぼ

Nannophya Pygmaea Rambur

トンボ科中、最も小型で成熟した雄は、腹部がうす
橙色をしていて、成熟した雌では腹部が全体的に黒く
て、黄色の横縞をもっている。はねは透明であるが、
基部からはねの中頃まで広がる鮮やかな橙色はきわめ

資料室

て美しく、初めて見る人は、その可
憐さに感嘆の声を発するであろう
本種は本来南方系の種類であるが
分布は広く、青森県まで知られている。しかし、発生
場所が湿地に限られているので、どこでも採集でき
るというものではない。県内の発生地も今のところ少
なく、発生する個体数もわずかである。だが市内居谷
里湿原はその発生量においては県下唯一のものであろ
う。胴の長さは1.3cm内外という超小型で6月下旬か
ら9月上旬まで発生するが、7月下旬頃が最も多く発
生する。幼虫(ヤゴ)は0.8cm内外で移動力が小さい。
羽化は水上 7~8 cmの草の茎や葉の上で最も多く行
なわれている。飛翔はゆるやかで、湿地の草の上を浮
くようにとんでいて、風などですと、飛翔をやめてしま
う。飛翔力も弱く遠方へはいかない。こういう生物
は乱獲をすれば直ちに絶滅してしまうから、お互に自
然界のモラルを守り、永く保護したいものである。

写真はオニヤンマと並んだハッチョウトンボの
雌(左)雄(右) (倉田稔)

遭難救助の实地訓練

今冬北アルプスの遭難は目立って多かったが、これら
の遭難の防止に、また救助の敏速化を計るため、北ア
山麓で初めての救助対策実地訓練が行われることにな
った。北アルプス遭難対策協議会、市観光課、大町市観光
協会の共催で25日から2泊3日の予定で鹿島槍、冷沢の
本沢(1800m)で関係者25名が集まって実地訓練をする
今回は主に雪洞、山岳気象、テント、ナダレ、遭難者の
搬出などについて学ぶ。

(博物館だより)

- 2月16日(日) 大町山の会スキー大会(北安新城佐野坂
スキー場)
- 2月20日(木) 山の歌声(公民館社交室) 市内公民館調
査打合せ(公民館社交室)
- 2月22日(土) 古原氏ヒマラヤ遠征社行会(公民館講堂)
銀河会会報発行
- 3月2日(日) 生物、医学談話会準備会(公民館応接室)
- 3月5日(水) 信大教育学部松本分校生来館
- 3月6日(木) 山の歌声(公民館社交室)
- 3月9日(日) 映画「遭難」試写会(大町演芸館)

お願い 本紙の購読御希望の方は一カ年購読料17
0円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、
郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館宛、ご
送金下さい。

大町山岳博物館

今月の寄贈 長野県教育委員会年報(32年版)

1冊長野県教育委員会 自然科学と博物館(24巻11-12
号) 1冊国立科学博物館 国立公園(98-99号) 国立公
園協会 動物分類学 昆虫学(生物実験講座5) 各1冊
東京都鶴田總一郎 山岳部報(4号) 1冊呉羽紡績大町
工場山岳部 山嶺(334号) 1冊東京都野路会 趣味の登山
(15号) 1冊京都趣味登山会 山と溪谷(224号) 1冊
東京都山と溪谷社 まどのゆき(22号) 1冊新潟県積雪
科学館 ひらくら(6,7,8,9,12,13号) 各1冊案内
書1部ニュース(5号) 1冊三重県立博物館(敬称略)

新年度予算市会に上程

昭和33年度予算が3月11日から開かれている、予算市会
に上程された。それによると博物館費4428,000円で昨年
に比較して520,000円の減、昨年は移転工事など大きな
ものがあったためである。新規には簡易水道引水工事12
00,000円が注目される。予算案は3月下旬には本決まり
となる。

編集後記 3月とはいえ、4月のような天候である。
植物の芽吹きが盛んに春を呼ぶ。博物館も長い冬眠から
さめた感。フィールドに活躍できる時期も間近い。今年は
特に資料収集に重点がおかれ、それに関連して調査活動
も進められていく。

山と博物館 第3巻第3号 1958年3月20日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 松本市市上町353
信州印刷株式会社